

---

# 最強の我流剣術

真条

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強の我流剣術

### 【Nコード】

N6673X

### 【作者名】

真条

### 【あらすじ】

剣と魔法の世界 【イビルス・オンライン】 それは世界初のVRMMO。

しかしそれは一瞬にしてゲームから現実へと変わる。

その混沌とした世界の中、二人の兄妹が前に進み始める。

## 序章（前書き）

初めての投稿です。なんとなく読んでください。

## 序章

「ふっ！」

「よっ」と

舞の繰り出した面打ちを体を捻ってひよいとかわし、サイドステップで理雄は距離を取った。

今理雄と舞がいるのは自宅の庭だ。そこで竹刀と防具を着け、十分前から打ち合い続けている。

「ふー」

「・・・」

理雄と舞は沈黙を保っている。

が、一瞬の沈黙を破ったのは舞だった。

「つつ！」

舞の神速と言っても過言ではない突きが喉に迫るも、それを理雄はあっさり下から弾いて逸らし、その場で回転して右手の竹刀を舞の胸に叩きつけ、打ち合いは止まった。

「つつつ、兄さんあれは反則すぎます！」

「別に回転するぐらいいいじゃないか」

理雄と舞は庭に面した縁側で、一緒に座っていた。

「だって背面への攻撃は駄目ですし、弾いてからの兄さんの身のこなしが速すぎます・・・」

「あはは、自分でなんとかしろよ」

「ああもつつ！」

舞はどうか理雄に勝とうとしているが、それもそのはず。

舞は中3の時、剣道大会中学生の部で全国優勝してしまったのだ。

舞が剣道をやり始めた頃は中学一年で、その頃理雄は舞が使っている竹刀をこっさり持ち出してはそれを振り回して遊んでいた。

しかし、舞が中学になると理雄が使っているのがようやく舞もわかり、

「そんなに使いたいなら私に勝つてから使ってください!」  
と舞が怒鳴り、理雄はその日こてんぱんにやられた。

それからというものの、意地になった理雄は毎度毎度勝負を挑んではは負け、挑んでは負けていた。

しかし、日々舞との模擬戦のおかげで理雄の動体視力と身体能力は、その頃には既に舞を凌駕していた。

そしてついに舞から一本取った時の舞の呆け面といったら・・・

「兄さん、何を考えているんですか?」

「うおっ!」

やばい、舞の顔が顔は笑顔、雰囲気は修羅という矛盾したとてつもないものになっている。

「なななんでもないぞ」

「そうですか」

言うておくが、舞は理雄専用のエスパーなので理雄が何を考えているかはすぐにわかってしまうのだ。

「そういえば兄さん、あれはまだ届きませんか?」

「あ、ああ。あれなら・・・」

急な質問に驚くも理雄が答えようとした瞬間、

「理雄ーッ!朝ごはんできてるわよーッ!」  
母さんの声がそれを遮った。

「お、もうそんな時間か。行くぞ」

「はい」

朝の7時、今日はとても平和だった。

「じゃあ兄さん、私はここで」

「おお、気をつけてな」

理雄と舞は高校と中学の分かれ道で話をしていた。

「あと兄さん、朝も聞いたんですけど・・・」

「イビルス・オンラインのパッケージだろ？あれなら今日には届くと思うぞ」

「やった！」

普段学校ではクール（らしい。中学の舞の友達から聞いた。聞いたところ家の様子とは大違いだそうだ）な舞がにっこり笑って喜ぶ姿は、【喜】を周囲に振りまいていた。

「じゃあ兄さん、またあとで！」

「おう！帰りもここで待つてるぞ！」

理雄と舞は、そこで別れた。

先程理雄と舞が話したイビルス・オンラインとは、最近頭角を現し始めたVRゲーム初のMMOだ。

VRゲームの始まりは数年前に発表されたオフラインの操縦ゲームが始まりであり、しかもそのソフトは半日で全国すべての物が売切れるという偉業を成し遂げたのだ。

それを機にゲーム会社はこぞってVRゲームの開発に力を注ぎ始めた。

それと同時に動き出したプロジェクトが、オンラインゲーム用サーバの作成だ。ゲーム会社の各社は力を一つにし、サーバの作成に取り組んだ。

しかし思った以上にサーバの完成は難しく、大量の不具合を修正し終わった頃には7年の歳月が過ぎていた。

これほどの時間がかかった理由の一つに、カルドシステムという画期的なシステムを作る時間がかかったのが挙げられる。これはシステムに思考能力を持たせ、ゲーム内の通貨の流通からシステムの不具合までを自律的に調整するものだ。これにはどの開発会社も手こずり、理系の科学者の協力も得てようやく完成したというとなつてもないものらしい。

それだけの苦労を経てできたVRMMO【イビルス・オンライン】の抽選販売に運よく理雄達は当選し、そのソフトが今日家に届くの

だ。

ちなみにゲーム本体であるヘッドギア型の機械は、初期のVRオフライン操縦ゲームを買った時に二人とも買っている。

理雄はそれを買った時はゲームにどっぷり浸かっていたので当たり前のように買ったのだが、何を思ったのか舞も買ってやり始めた。それから舞は剣道をしながら勉強をし、さらにゲームを準廃ゲームー並みにやるという異常な生活を始めた。その頃の舞のハマりっぷりには、理雄もかなりひいたそう。

「さあ兄さん、準備してください！」

「おう。それにしてもはりきってるなあ」

「あたりまえです！だって私は・・・」

「え？」

「な、なんでもありません！さっさとヘッドギア被ってくださいっ！」

「お、おう」

やけに顔が赤い舞の剣幕に気圧され、理雄はいそいでヘッドギアを装着して耳元のボタンでロックをした。

「あと30秒ですよ！」

「わかってるって」

20、10、9、8、7、6、5、

「じゃあ兄さん、また」

「おう！」

4、3、2、1、

0。

その時は、まだ平和だった。

## 序章（後書き）

感想や改善点等あったら是非お願いします！



## 設定（前書き）

とても短いです。

## 設定

「うおっ」

理雄は真つ暗な空間の見えない地面に足をつけた。

『イビルス・オンラインによっこそ!』

「うわっ!」

暗闇の中、全方位から聞こえてきた声に理雄は思わず飛び上がった。

『今から各種設定をいたします。お手元のタッチパネルをご覧ください』

「これか?」

アナウンスが聞こえた瞬間、理雄の目の前に光るタッチパネルが出現した。

『表示されている項目をタッチで選び、終わったら一番下の完了ボタンを押してください』

「はいよー」

返事が返ってこないのは分かっているのだが、理雄は思わず返事をしてしまった。

「えーと・・・」

今表示されているのは、

- ・名前
- ・スタイル
- ・スキル
- ・初期武器
- ・初期防具
- ・外見変更

この六つだ。

「名前は・・・リオでいいか。舞もすぐ分かるだろうし。スタイル? 剣士と魔法士と生産職・・・当然剣士だよな。スキル・・・」

結果理雄のステータスは、

・ r i o

・ 剣士

・ スキル

? 剣士スキル…… 剣士の技を得る。 パッシブスキル

? 索敵…… スキル名コールで周囲のアイコン付きオブジェクトを

検索する。 アクティブスキル

? 戦闘回復…… 戦闘中徐々に回復。 パッシブスキル

? 諸刃の剣…… スキル名コールでMP50%を消費し、一部の防

御力を攻撃力に変える。 アクティブスキル

? 神速…… スキル名コールでMP50%を消費し、防御力を攻撃

力に変換する。 アクティブスキル

・ 片手剣【重】

? スチールソード

・ 革装備

? レザーコート

? レザーグローブ

? レザーベルト

? レザーブーツ

となった。

『準備はよろしいですか?』

「おう、いつでもこい!」

そう言うなり理雄の体が光り始め、体が透けてきた。

『ではいつてらっしゃいませ。ゲームという名の現実へ』

理雄はその場から忽然と消えた。

## 設定（後書き）

設定の外見変更ですが、これは現実の顔を一定まで変化するという  
ものです。

戦闘回復、諸刃の剣、神速は初期は使い物にならないです。

特に戦闘回復、これは10秒毎に回復しますが初期は1しか回復し  
ません（笑）

正直最初はこのスキルあまり意味ないです。

10月17日6時 一部修正

**最強の片鱗（出力1%）（前書き）**

後半は本気の1%ぐらいです。

## 最強の片鱗（出力1%）

「・・・うわ・・・すっげえ・・・」

リオが出現したのは、大きな広場の噴水の前だった。

その噴水の周りには、軽く見ても5万人は超している。

この広場は【始まりの町】という何とも安易なネーミングの町だ。

初期ログインしたプレイヤーは全員ここからスタートする。

ちなみにイビルス・オンラインの初回発売数は10万の為、少なくとも今見えているプレイヤーの約2倍はいるということだ。

しかしリオはそんな事は微塵も考えず、まずゲーム開始直後にやったことは、

「まぁーーーーーい、どおーーーーーこだぁーーーーーッッッ  
!!!」

妹を探すため、名前を叫びながら探しまわることだった。

「もうっ兄さん、恥ずかしいのであんな事はしないでくださいっ！」

「でもああしないと会えなかつたろ？」

リオ達は無事再会し、噴水のそばでしゃがんでいた。

探し人が前方20メートルにいたので、実際叫ばなければ分からなかったはずだ。

「うっうっ・・・さっさとステータスウィンドウ見せてください・・・」

「  
始めたらすぐステータスを見せ合うのは、家で事前に決めていたことだ。」

「ごめんごめん、ほら」

そう言っリオは開いた右手を振りおろしてタッチパネルを出現させ、それを可視モードにした。

「・・・兄さんもリアルネームそのまま使ったんですか」

「おう・・・って、兄さん『も』？」

「はい、私もです」

「そ、そうか・・・」

そこで会話は途切れ、舞は手元のタッチパネルを見始めた。

「兄さん、この【諸刃の剣】と【神速】なんて、スキルにありました？」

「かなり下の方に普通にあっただぞ」

「ああつ・・・私の馬鹿・・・」

ガクツと舞はうなだれた。

「こんどは舞のを見せてくれよ」

「はい・・・」

そう言つて舞は沈んだ表情のままステータスを見せてきた。

「どれどれ・・・」

・ m a i

・ 剣士

・ スキル

? 剣士スキル

? 索敵

? ヒール系統魔法

? 鼓舞

? ダツシュ

・ 両手剣【細】

? スチールブレード

・ 布装備

? 布ジャケット

? 無し

? 布ベルト

? レザーブーツ

「布装備は軽いから動きやすいけど腕装備が無いのか・・・という

か、剣士で魔法使えるのか!？」

「ええ、普通に選択できましたよ?」

「そんな・・・剣士は無理だと思ってた・・・ッ!」

「ふふつ、剣士でも使えるには使えますけど、剣士はMP少ないし魔法スキルの熟練度の上昇率も低いですよ」

「そう言われるとビミョーなような・・・」

「でしょう?」

むむむと唸るリオをマイは笑っている。

「ぐぬぬぬ・・・あれ、じゃあなんでマイはヒールスキル選んだんだ?」

「へ?え、あ、そ、それは・・・・・・つ、使ってみたかったからです!!」

「うお、そ、そうか」

急に顔を赤くしたマイの叫びに、リオは思わず納得してしまった。

「そ、そうだ兄さん、狩り行きましよう狩り!」

「・・・武具屋ぐらい見ていかないか?」

「さあ兄さん行きましようほらさっさと歩く!」

「お、おう」

顔の赤い少女と戸惑った表情の少年がフィールドへと歩き出した。

(・・・よっわ・・・)

「兄さん、別のフィールドへ行きませんか?」

二人はとても落胆していた。あまりにモンスターが弱すぎるのだ。

それもそのはず、片や中学最強の剣道の腕前を持つマイ、そのマイを倒す我流剣術を持つリオ。

二人が初心者用モンスターに負けるはずがないのだ。

「・・・よしマイ、もっと向こうまで行こう。20キロぐらい向こうまで」

「そうですね、ここは話にならないです」

一度トレインしたモンスターの群れをリオ達はなすりつけられたも



のの、たった数分で殲滅してしまった。

そのことに周りのプレイヤーは驚いていたが、リオ達はモンスターの弱さに驚いていた。

「もっと歯ごたえのあるモンスター探すぞー」

「おー」

二人の20キロ競争がスタートした。

**最強の片鱗（出力1%）（後書き）**

三人称上手く書けていますか？

## 中ボス登場（前書き）

ボス登場、でもリオ達が強い。

## 中ボス登場

「・・・ふう、随分遠くまで来たな」

「そうですね、50キロぐらい走ったんじゃないですか？」

走り終わったリオとマイは地面に座って休憩していた。

別にスタミナなどこの世界にはないので疲れたわけではない。ただ気になるものが向こうの方に見えたのだ。

「マイ、あれなんだと思う？俺は壁に見えるんだけど」

「私も同じです兄さん。この距離でこの見え方からしてかなり大きな壁ですね」

リオ達が勢い余って20キロどころか40キロほど走ったところで、遠くの方に二人とも何かを視認したのだ。

「というかモンスターと戦闘しながらよくこんな速くこんなところまで来たな。現実じゃ絶対何時間もかかってるぞ」

「素早さのステータス補正のおかげだと思います。それで現実より速く走れるんだと思いますよ」

そう言っただけでマイは後ろを振り向いた。すでに始まりの町は見えず、他のプレイヤーも一人もいない。

なぜなら、ここらへんは初心者にとっては厳しいモンスターが出るため初期装備でここまでくるバカはいないのだ。

・・・そんな初期装備のバカがここに二人いるのだが。

「それにしても、これだけ来たのに強い敵が全くいないってどういう事だ？さすがに一瞬とはいかなくなっただけ、ほとんど数十秒で終わっちまうぞ」

「運営の、モンスターの調整ミスでしょうか」

ただプレイヤースキルが異常なだけである。

「もう始まりの町帰ってログアウトするか？このフィールドつまんねえ」

「ええ、もうそろそろ深夜ですし、今日の狩りはこれぐらいにしと

きますか」

ちなみにフィールドでログアウトすることはできない。キルされる直前にログアウトするというお手軽脱出法ができてしまうからだ。

「そうだな、今日はこれぐらいで……」

「兄さん！あれ見てください！」

「ん？おお！」

二人が揃って驚いた声を出した理由は、前方20メートルにこれまでとは明らかに格の違うやつが出現したからだ。

『グオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

そこで咆哮をあげたのは、赤い体表に太い棍棒、鋭い牙に一本角、体長は人間の4倍もある生物だった。

「これは……赤鬼ってどこか？ここまで来てやっと強そうなやつでできたな……」

そう言つてリオは背中にある剣を抜き放った。マイも腰から鞘を滑らせ刀を抜刀し、正眼に構えた。

『グルアアアアアアアア！！！』

赤鬼はリオとマイを見つけるなり、ひとつ飛びに距離を詰めて右手に持った棍棒をリオとマイが立っていた辺りに叩きつけた。

「ッ！」

「つと！」

マイはスキル【ダッシュ】を発動し

静止状態からの一歩目

の速度上昇＋歩幅アップ

棍棒を避けて赤鬼の左へ回り込んだ。

しかしリオはそんな便利なスキルを持っていないため、ステップでギリギリのタイミングで後ろに避けた。

のだが

「ぐあッ！！」

「兄さんっ！」

棍棒から放射状に出現した衝撃波のような物に体を叩かれ、リオは後ろに吹っ飛んだ。

「俺は大丈夫だ！攻撃してろツツ！！」

「は、はいっ！」

リオの怒号に背中を押されたマイは、赤鬼の左肩から腰までを縦一線に切り裂いた。

「ギャアアアアアアアアアア！！」

その一刀だけで赤鬼は怯み、たたらを踏んだ。

（・・・さっきの範囲攻撃をくらのなけりければいけるか？）

そう思つて立ち上がったリオは、まだ態勢が整っていない赤鬼にダツシユし、ダツと地面を蹴つて赤鬼の顔の真ん前に跳躍、ズバババツと鼻つ面を切りつけてその顔を踏んで後ろに距離を取った。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツ！！！！！！」

一瞬で大ダメージをくらつた赤鬼からは頭から湯気のようなものが吹き出し、その場で奇声を上げながら棍棒を地面に思いつき叩きつけた。

「うわっ！」

「きゃ！」

リオとマイは、足元を襲つた揺れに対応できずに態勢を崩した。

「ギョアアアアアアアアア！！」

その隙を赤鬼は見逃さず正面にいたリオにさつきとは大違ひのスピードで飛びかかった。

「マイの方が断然速いな」

そう呟いたリオは、唸りを上げて襲いかかってくる棍棒の側面を、剣でカウンターになるように切りつけた。

結果、赤鬼の棍棒は半ばから断ち切られた。

「ギョア！？」

飛んでいく棍棒の先端にひるんだ瞬間に、マイも接近して攻撃を再開した。

「ギャアアアアアアア！！！！」

またもや一秒で怯んだ赤鬼は、とりあえず棍棒を振り回そうとしたのだが、

「終わり、だ！」

懐に潜り込んだリオが腹を横なぎに払うと、赤鬼は不自然な体勢のまま硬直し、バシユツという音とともに消滅した。

「・・・ボスモンスターで1分か」

リオはそう呟いた。

中ボス登場（後書き）

次回はデスゲーム化します。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6673x/>

---

最強の我流剣術

2011年10月19日09時22分発行